

第5回考古天文学会議 研究報告①

日本考古学における埋葬方位研究の歴史

東海大学大学院文学研究科博士課程前期2年 白川美冬

1. はじめに

死者を弔うときに執り行われる儀式や演出には、しばしば生前の被葬者を象徴する社会的地位や、被葬者あるいは葬送祭祀を執り行う集団の信仰観や死生観が反映されます。そのため、被葬者の諸属性を把握する手段として、墓制研究は重視されてきました。

埋葬施設に関連する方位の研究もその一つです。19世紀に開始された埋葬方位研究は、精神文化や社会構造を紐解く手段として、積極的に活用されてきました。しかし、発掘調査の増加に伴う資料の蓄積や研究領域の細分化によって、列島全体の様相を把握することが困難になりました。そのため、研究者たちが残した成果を通時的に把握することが難しいという問題を抱えています。

そこで本発表では、報告者が収集した256件の文献のうち、埋葬方位の規定要因を論じた213件を対象に、論考が公表された時系列に沿って整理し、埋葬方位研究の現状と課題を考えたいと思います。

2. 埋葬方位研究の歴史

① ～1920年代：方位研究の萌芽

最初の研究は1890年代にまで遡ります。その先駆的な偉業を成し遂げたのがウィリアム・ゴールランドです。横穴式石室を有する古墳の实地調査を行った彼は、南側に開口部を設けた事例が多いことを発見し、太陽崇拜との関係を指摘したのです(Gowland 1897)。しかし、この成果は英国側で公表されたため、1981年に翻訳本が刊行されるまで、日本で知られることはありませんでした。

日本で方位研究が再開されたのは、大正時代のことです。日本人の起源を探求する人類学者たちが人骨を収集する過程で、結果として縄文時代の墓制研究は充実し、埋葬頭位の研究が開始されたのです。その第一人者が長谷部言人です。長谷部は、岡山県津雲貝塚の埋葬頭位が東を向くことを指摘し、太陽への忌避性との関係で論じました(長谷部 1920)。また、同年には大串菊太郎や清野謙次も、埋葬頭位と天体崇拜との関わりを論じています(大串 1920、清野 1920a)。

長谷部らが埋葬頭位を精神的な側面から理解した一方で、埋葬頭位が地形条件に左右されたのではないかと考えた研究者もいました。それが小金井良精です(小金井 1923)。こうして、埋葬方位研究では、埋葬方位を積極的に評価する立場と、消極的に評価する立場の両者が並列したのです。

② 1930年代：方位研究の波及

旧日本軍が中国大陸に進出し、国際情勢に暗雲が漂い始めたころ、考古学者もようやく埋葬方位研究をスタートさせました。たとえば、群馬県白石古墳群の発掘調査を担当した後藤守一は、古墳群の変遷を3様式に区分し、前方部の方位が古墳築造の時期を判断する指標になる可能性を指摘しています(後藤 1934、後藤・相川 1936)。また山内清男は、岡山県津雲貝塚の埋葬人骨が、若干の感覚を空けて埋葬されたことから、縄文時代の墓地が森林に形成されており、立木の配置に人骨の配置が規定されたというユニークな仮説を打ち出しています(山内 1936)。

③ 1940年代：皇国史観の隆盛

日本が天皇制絶対主義に傾倒した影響は、方位研究にも及んでいたものと考えられます。たとえば、鏡山猛は弥生時代の箱式石棺が東西方向に向けられた理由を、太陽信仰の反映だと解釈してい

ます(鏡山 1940)。2頁以上にわたる太陽信仰への言及は、徹底した資料追求を行う鏡山の性格にとどまらず、皇国史観の隆盛が反映されているのかもしれませんが。

また、鏡山が太陽信仰を論じた一方で、八幡一郎と三宅宗悦は、埋葬頭位が地形条件に規定されたとの立場をとっています(八幡 1940、三宅 1940)。ここで注目したいのは、八幡による先行研究の引用方法です。太陽信仰論を一切引用せずに論を終えています。これは、太陽信仰の痕跡を求めていた政治的な風潮に対する無言の抵抗だったのかもしれませんが。

また、第二次世界大戦が終戦を迎えたころ、清野謙次の著書が刊行されます(清野 1946、1949)。その内容は、縄文時代の埋葬頭位が東を向く要因を太陽崇拜との関係で論じ、それを日神崇拜の源流と理解したものでした。人類学者という立場から、植民地政策や侵略戦争を扇動してきた清野は、戦後においても国粹主義的な立場を貫いていたようです。

④ 1950年代：実証主義の稼働

日本が復興へと歩み始めたころ、北海道モヨロ貝塚の発掘調査が行われました。調査担当者の兒玉作左衛門は、エスキモーやアイヌ民族の習俗を参考にしながら、普通の被葬者は河川を基準に頭位が定められた一方で、不慮の死を遂げた人物は、祟りを避けるために別の方角に向けられたと論じています(兒玉 1950)。これが死因の違いを埋葬頭位に関連づけたはじめての論考です。このほかには、太陽の昇る位置が埋葬頭位の基準になったと考える論考も公表されました(中山 1952)。

皇国史観からの脱却が求められたころ、唯物史観の影響は埋葬方位研究にも及びました。たとえば、岡本勇はルイス・H・モルガンの著作を引用しながら、縄文時代の埋葬頭位が血縁集団などの社会組織を反映した可能性を示唆しています(岡本 1956)。こうした影響もあってか、アマチュア考古学者が環状列石と太陽の対応関係を実証的に論じたとき、学会の反応は冷たかったようです(川口 1956)。

実証的に遺跡を捉える手法は、古墳時代研究者にも採用されています。とくに斎藤忠は古墳の方位と立地条件を精査するなかで、立地条件にかかわらず前方部を南に向ける事例が一定数存在することから、古墳の方位には何らかの思想が反映されたのだと考えました(斎藤忠 1953)。

⑤ 1960年代：方位研究の発展

戦後の高度経済成長に伴う発掘調査の増加は、埋葬方位研究をより充実させました(酒詰 1962ほか)。たとえば、埋葬頭位と土器の分布圏を対応させた藤本英夫の論考や、埋葬頭位が性別で異なる可能性を示唆した向坂鋼二の論考があります(藤本 1961、向坂 1962)。

こうした状況下で埋葬方位研究をリードした一人が大塚和義です。大塚は北日本における縄文時代の埋葬頭位を通時的に把握し、3つの画期をみいだしました。それが、頭位に統一性のない第Ⅰ段階、遺跡内である程度の範囲に方位が集中する第Ⅱ段階、第Ⅱ段階が土器の分布範囲に適応可能な事例と、より方位傾向が統一的となる事例が併存する第Ⅲ段階です。そのうえで、第Ⅱ段階に環状列石の分布と西北頭位になることから、太陽・月・星などの天体を基準に埋葬頭位が規定されたことを指摘したのです(大塚 1967)。これに異議を唱えたのが渡辺誠です。地形条件を無視した大塚の議論を批判し、抜歯風習と埋葬観念が連動することを論じています(渡辺 1969)。

縄文研究者が様々な議論を交わすなか、原田大六の問題作が刊行されました。福岡県平原1号墓の鳥居と埋葬施設が朝日の昇る日向峠に向けられたこと、八咫鏡と思われる大型内行花紋鏡が出土したことを根拠に、被葬者をオオヒルメノムチと判断し、弥生時代の伊都国に太陽信仰が存在したと指摘したのです(原田 1966)。日本神話を参照した原田の論考は、皇国史観の克服を目指す学会の風潮に反するものであり、かつて出版した著作がそうした理由から言論弾圧を受けていた影響も相まって、学会から拒絶されることとなります。

この頃には、古墳時代研究者の間でも様々な議論が展開されました。たとえば、同じ棺に複数埋葬された事例を対置・並置に区分し、血縁関係や婚姻関係で解釈した斎藤優の論考や、前方部と主

体部の関係を軸に、古墳の編年を考えた小林行雄らの論考があります(斎藤優 1960、小林行・近藤 1964)。また、末永雅雄が方位傾向を視覚化する手法を確立したのもこの時期でした(末永 1961)。この末永の論考を契機に、埋葬方位研究ではグラフが用いられるようになりました。

⑥ 1970年代：縄文方位論の多様化

方位研究が多様化するなか、刊行されたのが藤本英夫の『北の墓』です。北海道御殿山遺跡などの埋葬頭位が太陽の出没範囲と重なる現象を、造墓活動が行われた時期の反映と捉えた藤本は、近世アイヌの死生観を参考にしながら、太陽信仰の関係で理解しています(藤本 1971 ほか)。いままで科学的根拠のないまま論じられてきた太陽信仰の存在を、遺跡の位置情報と太陽の運行範囲を基に立証した初めての論考でした。

また、この頃には林謙作による先行研究批判が行われました。東北地方における縄文時代の埋葬頭位が複方向に区分されること、抜歯方式と埋葬頭位に対応関係が認められることから、埋葬頭位には生前の社会的な位置づけが反映されたと考えた林は、死生観や埋葬習俗の問題として埋葬方位の議論を矮小化することを批判しています(林 1977a ほか)。

埋葬頭位から社会構造に迫る研究は弥生時代にも行われています。山口県中の浜遺跡を点検した甲元眞之は、墓壇の主軸が東西方向と南北方向に4対1の割合で区分され、前者にのみ小児墓が伴うことから、前者をムラ出身者、後者を外部からの婚入者と判断したのです(甲元 1977)。

縄文・弥生研究が社会構造を把握し始めたころ、古墳研究は政治関係を解明する方向に舵をとりつつありました。それを先導したのが都出比呂志です。弥生墳丘墓と前期古墳の断絶性に注目し、前期古墳に顕著な北頭位への指向性を、政治関係の変容に伴う新たな葬送祭祀の成立と理解したのです(都出 1979)。こうして、古墳研究者の多くは、大和政権との類似性あるいは相違性の探究に傾倒していきました。

⑦ 1980年代：古墳方位ブームの到来

方位を扱う発掘調査報告書も増加し、埋葬方位を巡る議論はますます活発化したようです。この頃、縄文研究者のあいだでは、頭位方向の違いを社会組織の違いと捉えることが多くなりました(林 1980 ほか)。埋葬頭位の違いを出自に求める研究姿勢は、一部の研究者から批判を受けつつも、異なる時代の研究者にも影響を与えました(辻村 1983 ほか)。

また、この時期には福島県三貫地貝塚の埋葬頭位が鹿狼山山頂に向けられたことが報告されました(森 1988)。民俗学的な点検も行われ、鹿狼山が始祖をまつる霊地であった可能性が指摘されています(佐々木 1988)。これが周辺景観を組み込みながら、山中他界を論じたはじめての論考でした。

古墳研究者のあいだで前期古墳を中心とした埋葬方位研究ブームが巻き起こったのもこの時期です。埋葬頭位の傾向や墳丘軸線と埋葬施設の平行・直行関係には、普遍的側面と地域的側面が認められることが、次々と明らかになりました(天羽・岡山 1982 ほか)。とくに方位研究ブームの火付け役である都出比呂志は、畿内地域を中心に認められる北頭位の優位性が、古代中国の儒教思想の影響下で誕生したことを指摘し、北頭位を採用する被葬者を中心勢力と親密な在地首長あるいは中心勢力からの派遣将軍だと論じています(都出 1986a ほか)。

⑧ 1990年代：方位研究の成熟

方位を積極的に理解する動きによって、方位研究は成熟期を迎えます。縄文研究者のあいだでは、埋葬頭位の規定要因を出自・性差・年齢・死因に求めることが主流となり、太陽を基準に埋葬方位を定めたと考える論考も増加しました(堀越 1991 ほか)。

集団内における方位の差異を出自・性差・死因に求める研究は、弥生方位研究にも認められます(池淵 1994 ほか)。しかし、こうした視点で方位の規定要因を考える研究者は一部であり、むしろ、東西と南北の優位性や、地形と墓壇の直交平行関係から、遺構の新旧関係や古墳時代との連続性あるいは断絶性を探求することに主眼が置かれたのです(亀山 1994 ほか)。

古墳方位研究では、政治関係が重視され、埋葬頭位の傾向や墳丘軸線と主体部の配置関係から、被葬者の政治関係や階層関係を論じた研究が多く公表されています(北條 1990 ほか)。しかし、90年代後半に古墳時代の政治体制を再考する機運が高まると、地域の自律性ないし主体性も重視されるようになりました(伊藤 1995 ほか)。また、丘陵上に立地する古墳の前方部の向きと尾根筋の関係から、地域固有の規範を顕在化させた論考や、婚姻関係や血縁関係という視点で埋葬頭位を理解する論考なども提出されています(吉水 1991)。この時期に古墳方位研究が多様化するのには、全国 5000 基以上の古墳を集成した『前方後円墳集成』が刊行された影響もあったのだと思われます。

⑨ 2000 年代：景観史学の本格化

縄文時代の埋葬頭位を社会組織の反映と捉える通説の再検証が行われました。その代表的な研究者が山田康弘です(山田 2004 ほか)。埋葬頭位と抜歯などの対応関係を検討し、両者に対応関係がないことから、縄文時代の埋葬頭位が遺跡周辺のランドマークや地形、遺跡間の相対的な位置関係、年齢や性別など、多様なあり方を示すと論じたのです(山田 2003 ほか)。また、景観史的な観点から方位の規定要因を探る試みも継続的に行われていました(大工原・関根 2001 ほか)。

この頃には弥生時代の埋葬方位研究も下火となり、方位の規定要因を合理的に理解する動きが強まりました(内藤 2003 ほか)。とくに地形条件が方位を規定したと考える論考は、弥生研究者のみならず古墳研究者からも支持を得ています(片桐 2002a ほか)。

古墳研究者が方位傾向と周辺環境を統計的に把握したのもこの時期です(北條 2003 ほか)。また、GIS 技術の著しい発達によって、古墳の配置関係や周辺景観を組み込むことも可能になりました(北條 2009a ほか)。

⑩ 2010 年代：考古天文学の始動

この頃には、縄文時代や弥生時代の埋葬方位研究は停滞し、埋葬方位を扱う研究者も減少します(山田 2010 ほか)。一方で、古墳研究者は方位の規定要因を模索し続けており、政治史的・景観史的な理解のほか、生者からの視覚的効果を重視したと考える論考も提出されました(福永 2011 ほか)。

また、古墳方位論に新たな研究手法が導入されたのもこの時期です。菅原康夫や赤塚次郎が、太陽の出没場所を基準に主体部や墳丘軸線が規定された可能性を指摘したのです(菅原 2010、赤塚 2014)。こうした議論に触発された北條芳隆は、過去の天体運行や周辺景観と古墳の関係を厳密に点検し、東西頭位を採用した事例を太陽信仰、北頭位を採用した事例を北辰信仰の反映だと論じました(北條 2017a)。

⑪ 2020 年代：視認性の追求

景観史的観点から古墳の方位を捉える有用性が認識され始めた結果、周辺景観を含めた議論も増加しました(赤塚 2020 ほか)。この議論から派生したのが視認性の問題です。たとえば、滝沢誠や筆者は水上交通路からの視認性が古墳築造時に重視された可能性を指摘し、河野一隆は一部の装飾古墳に西日が差し込む演出が採用されたことを論じています(滝沢 2020 ほか)。

また情報処理技術や位置情報技術の目まぐるしい発展は、地域を飛び越えた分析を可能にしました。Google Earth を活用した論考もその一つです(Baratta et al. 2022)。こうして、埋葬方位研究は海外の研究者から注目を集めるほどに成長したのです。

3. 今後の展望

以上、埋葬方位研究の歴史を概観しながら、方位の規定要因を巡るさまざまな議論を取り上げてきました。ここからは、埋葬方位研究の現状を私なりの観点から見ていきたいと思います。

①時代別の傾向—縄文・弥生・古墳—

図 1 は埋葬方位の規定要因を論じた文献を、時代別に分類したものです。複数の時代を対象とした論考をその他としました。古墳時代を対象とした論考が圧倒的に多く、縄文時代を対象とした論

考がそれに続き、弥生時代を論じた研究や、複数の時期を扱った研究は少ないことがわかります。なぜ縄文・古墳が多く、弥生・その他が少ないのでしょうか。

そもそも弥生時代の墓制論は、外来文化の窓口である北部九州を中心に展開されてきました。とくに、弥生時代中期に出現する甕棺墓は、北部九州の弥生文化を特徴づける一大要素として知られています。しかし、甕棺墓の軸線方位を点検した論考は数える程度で、むしろ配置関係が重視されてきました。

図2は甕棺墓が発見された佐賀県吉野ヶ里遺跡の遺構図を示したものです。二列に埋葬するかたちで墓域が形成されており、甕棺墓の方位は一見乱雑に見えます。甕棺墓の埋葬方位研究が希薄なのは、こうした発掘調査現場での心証が影響したのでしょうか。

また甕棺墓には、弥生時代中期初頭から前半に二列埋葬墓地を形成し、弥生時代中期後半には集塊状の墓地を形成するという特徴があります。少なくとも1990年代前半まで、この変化は史的唯物論的に捉えられてきました(溝口1995、2014)。つまり、単一で統一的な家族墓の二列埋葬墓地の段階から、複雑で複合的な集塊状の共同墓地を営む段階へ移行し、最終的には突出した特定集団が墳丘墓を築くという発展段階的な歴史観で理解されてきたのです(高倉1973)。

この基本認識は、他地域の弥生墓制研究にも影響を与えたと考えられます。たとえば、弥生時代の近畿地方では方形周溝墓と土壙墓が基本的な墓制として採用されており、方形周溝墓の内側に埋葬される人と、その外側に埋葬される人の二者が存在することから、前者を上位層、後者を下位層と理解しています(甲本1977、近藤1985)。なお、弥生時代中期の関東地方では白骨化した骨を壺形土器などに入れる再葬墓が盛行していました。こうした各地域の多様な様相も相まって、弥生時代の墓制研究では埋葬方位が重視されなかったのでしょうか。

しかし、弥生時代の埋葬方位研究が少ないことは問題です。縄文時代と古墳時代をつなぐ時代の客観的な事実関係の把握が不足していることは、通時的な把握を困難にしてしまうからです。このままでは、縄文時代から脈々と続いているかもしれない方位観念の問題を点検しないまま、各時代の特殊性あるいは前時代との断絶性のみが語られることになってしまいます。だからこそ、弥生時代の埋葬方位研究を行い、縄文時代や古墳時代との連続性の有無を精査していくことが必要なのです。

②研究内容の傾向—景観史研究—

さてここからは、縄文時代と古墳時代に注目してみたいと思います。縄文時代の埋葬方位研究は、大正期に埋葬頭位の研究を開始して以降、一定程度の割合で研究が行われてきました。とくに論文

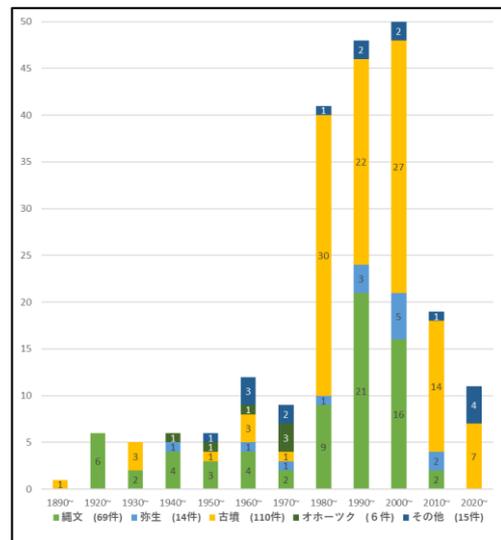


図1 時代別の傾向

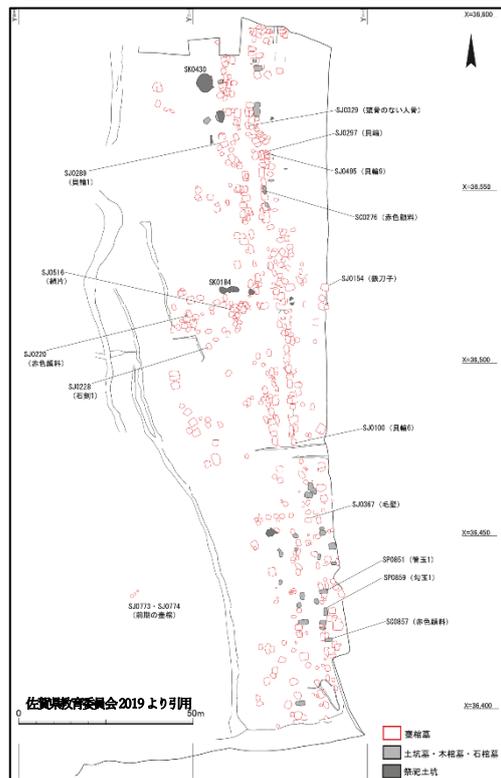


図2 佐賀県吉野ヶ里遺跡 二列埋葬墓地

数が急増する 1980 年から 2000 年の時期は縄文時代研究が活発化した時期です。研究内容を見てみると、1980 年代に画期が認められます(図 3)。この時期は、埋葬方位の規定要因を出自や景観に求めた研究が、本格稼働しはじめた時期です。埋葬方位から社会構造を論じた林謙作と、周辺景観との対応関係を論じた小林達雄の影響力の大きさをうかがい知ることができます。

また古墳時代の埋葬方位研究は、1980 年に急増して以降、一定程度の議論が行われてきました。古墳時代の画期は 1980 年代と 2000 年代にあります。1980 年代は方位傾向から政治体制を解明するうごきが活発化したこともあって、政治的な理解はもちろんのこと、それを補助する地域的・編年的な論考も多数認められます(図 5)。また、2000 年代以降は、北條芳隆の努力によって古墳時代の景観史研究も増加しました。

縄文時代と古墳時代の埋葬方位研究を見比べてみると、景観を巡る議論が活発化したのはごく最近であることがわかります。なぜ近年まで景観史的な観点を加えた議論は行われなかったのでしょうか。

まず、最初に考えられるのは技術的な問題です。地形の起伏を再現可能なカシミール 3D や Google Earth が研究者のあいだに普及したのは、ごく最近のことです。カシミール 3D を使用するためには、位置情報が必要となるため、Google Earth の精度が向上するまでは、GPS を活用した現地調査を行う必要がありました。しかし、現地調査を行うにも大変な労力がかかりますから、進んでこうした調査を行う研究者は少なかったのでしょうか。

次に考えられるのが、戦後考古学が抱える問題です。太陽関連の議論をまとめてみると、縄文時代の論考が時代を問わず一定数存在するのに対し、古墳時代の論考は 2010 年から増加しています(図 5)。古墳時代は皇紀に抵触する可能性があるため、こうした差が生じたのかもしれませんが。古墳時代に眠る太陽信仰の痕跡を探すことは、戦後考古学の方向性を全否定し、戦前の皇国史観を肯定することにつながりかねない危険性をはらんでいるのです。だからこそ、戦後考古学者は原田大六の論考を弾圧したのです。これは、視点をかえてみてみれば、専門的な教育を受けていない在地の研究者を弾圧することで、戦後考古学が科学的な歴史学であることを証明しようとしたのかもしれない。

こうした技術的・政治的な問題のほかにも、研究者側の意識的な問題もあるでしょう。現在と過去

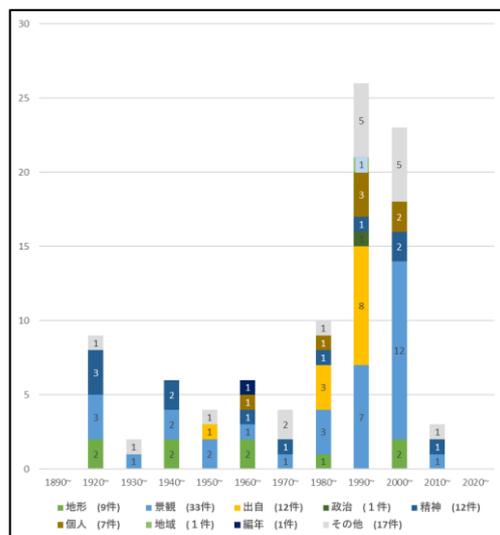


図 3 縄文時代の研究内容

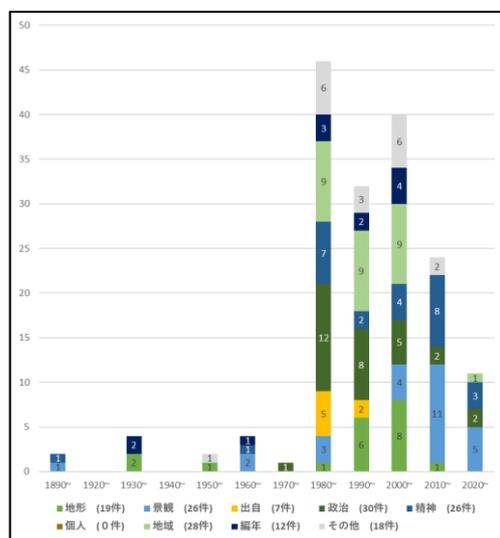


図 4 古墳時代の研究内容

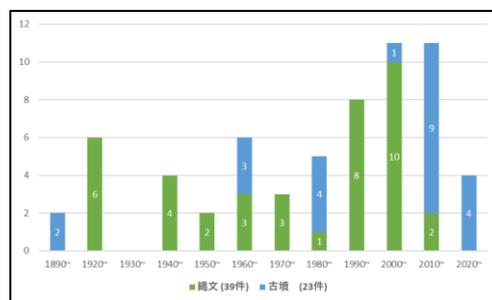


図 5 太陽との関係を論じた文献

では周辺景観が異なるため、視認性の問題にかかわる景観の問題を扱うことを無意味と捉える人が一定数います。こうした背景には、古代人が「厳密な方位測定を基礎にして頭位を決めているのではなかろう」（都出 1979、23 頁）という認識もあるのでしょうか。

では古代人は何を基準に方位を定めたのでしょうか。それはしばしば民俗方位と言われます。民俗方位とはその地域で生活を営む人々が、感覚的あるいは認識的に抱く方位観念を指します。そうした指標として有視望されているのが、集落の周辺を取り囲む山々や規則的に移動する天体運行などです。

豊かな感性の下で培われた多様な信仰観を保持していた彼らが、何の基準も設けることなく、墓を掘ったとは到底思えません。民俗方位で培われた方位観念を基礎に、社会的・宗教的・集団的な制約を反映させたと考えるべきなのです。周辺景観の点検が可能になった現代、考古学に必要なのは先入観を持たずに事実関係を精査していく姿勢なのではないでしょうか。

③埋葬方位研究のこれから

以上、二つの視点から埋葬方位研究を考えてきました。先に触れたように今後の埋葬方位研究に必要なのは、時代を越えた通時的な研究と景観史的な観点の導入だと私は考えています。こうした問題意識のもと、筆者は弥生時代から古墳時代に認められる方位の連続性に注目してきました（白川 2022）。その結果、愛知県の尾張平野では、弥生時代中期から古墳時代前期に至るまで、太陽の運行範囲に基づく方位の設定が行われた可能性が高いことが判明しました。その典型的な事例が、弥生時代の大規模環濠集落として知られる朝日遺跡や、古墳時代前期に築造された東之宮古墳です。言葉を語らぬ遺跡から、あらゆる可能性を引き出すことこそ、考古学を専攻する人々に課された使命なのではないでしょうか。

【埋葬方位 参考文献】

●～1920年代

Gowland William 1897 「The Dolmens and Burial Mounds in Japan」『Archaeologia』 ANTIQUITY

清野謙次 1920a 「肥後國宇土郡轟村字宮莊貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第 5 冊 京都帝国大学

清野謙次 1920b 「備中國淺口郡大島村津雲貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第 5 冊 京都帝国大学

長谷部言人 1920 「石器時代の蹲葬に就て」『人類学雑誌』第 35 卷第 1 号 日本人類学会

大串菊太郎 1920 「津雲貝塚及国府石器時代遺跡に対する二三の私見」『民族と歴史』第 3 卷第 4 号 日本學術普及會

小金井良精 1923 「日本石器時代人の埋葬状態」『人類学雑誌』第 38 卷第 1 号 日本人類学会

長谷部言人 1925 「陸前大洞貝塚(發掘)調査所見」『人類学雑誌』第 40 卷 10 号 日本人類学会

●1930年代

松本彦七郎 1930 「陸前國登米郡南方村青島介塚調査報告」『東北帝國大學理學部地質學古生物學教室研究邦文報告』9 東北帝國大學

後藤守一 1934 「上野國白石稻荷山古墳發掘調査概報」『考古学雑誌』第 24 卷第 1 号 日本考古学会

後藤守一 1935 「前方後円墳雜考」『歴史公論』第 4 卷 7 号 雄山閣

山内清男 1936 「石器時代人の寿命」『ミネルヴァ』第 1 卷第 2 号 翰林書房

後藤守一・相川龍雄 1936 『群馬県多野郡平井村白石稻荷山古墳』群馬県史跡名勝天然記念物調査報告第三輯

●1940年代

八幡一郎 1940 「日本先史人の信仰の問題」『人類学・先史学講座』第 18 卷 雄山閣

三宅宗悦 1940 「日本石器時代の埋葬」『人類学・先史学講座』第 15 卷 雄山閣

鏡山猛 1942 「原始箱式棺の姿相(二・完)」『史淵』第 27 号 九州大学文学部

清野謙次 1946 『日本民族生成論』日本評論社

兒玉作左衛門 1948 『モヨロ貝塚』北海道原始文化研究会出版部

清野謙次 1949 『古代人骨の研究に基づく日本人種論』岩波書店

●1950年代

- 児玉作左衛門 1950「モヨロ貝塚人の埋葬に就て」『考古学雑誌』第36巻第4号 日本考古学会
末永雅雄 1951「畿内地方の古墳立地」『考古学雑誌』第37巻第3号 日本考古学会
中山英司 1952「人骨」文化財保護委員会編『文化財保護委員会埋蔵文化財発掘調査報告』第1 文化財保護委員会
斎藤忠 1953「古墳方位考」『考古学雑誌』第39巻第2号 日本考古学会
川口重一 1956「大湯町環状列石の配置」『郷土文化』第11巻第1号 名古屋郷土文化会
岡本勇 1956「埋葬」『日本考古学講座』第3巻 縄文文化 河出書房

●1960年代

- 末永雅雄 1961『日本の古墳』朝日新聞社
斎藤忠 1961『日本古墳の研究』吉川弘文館
向坂鋼二 1962「埋葬」内藤晃也編『蜷塚遺跡 総括篇』浜松市遺跡調査会
酒詰仲男 1962「本邦遠古の埋葬について」『文化史研究』14 日本文化史学会
藤本英夫 1963「北海道の墳墓についての若干の考察」『せいゆう』1月号 北海道静内高等学校生徒会
小林行雄・近藤義郎 1964「古墳の変遷」『世界考古学体系3—日本III—』平凡社
藤本強 1965「オホーツク文化の葬制について」『物質文化』6 物質文化研究会
原田大六 1966『実在した神話』學生社
藤本英夫 1966「北海道の墳墓の問題点」『幌倉沼の墳墓』東川町教育委員会
大塚和義 1967「縄文時代の葬制」『史苑』第27巻3号 立教大学史学会
瀬川芳則 1968「弥生式時代の遺骸頭位について」『考古学研究』第15巻第2号 考古学研究会
渡辺誠 1969「亀ヶ岡文化における埋葬形態をめぐる二三の問題」『北奥古代文化』第2号 北奥古代文化研究会

●1970年代

- 藤本英夫 1971『北の墓』學生社
藤本英夫・河野本道・萩中美枝 1972「日本列島北部の墳墓の方位」『民族学研究』第37巻第2号 日本文化人類学会
藤本英夫 1972「埋葬の頭位の方向性についての一つの仮説」『北海道考古学』第8輯 北海道考古学会
石野博信 1973「三・四世紀の集団墓」『考古学研究』第20巻第2号 考古学研究会
藤本英夫 1975「北海道の墓地—とくにアイヌの墓地について」森浩一編『墓地』社会思想社
斎藤忠 1976「葬送儀礼」『現代のエスプリ』NO. 111 至文館
甲元眞之 1977「弥生時代の社会」金関恕・佐原眞編『古代史発掘 四 稲作の始まり』講談社
林謙作 1977「縄文期の葬制 第二部」『考古学雑誌』第63巻3号 日本考古学会
都出比呂志 1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻第3号 考古学研究会

●1980年代

- 春成秀爾 1980「縄文合葬論」『信濃』第32巻第4号 信濃史学会
林謙作 1980「東日本縄文期墓制の変遷(予察)」『人類学雑誌』第88巻第3号 日本人類学会
天羽利夫・岡山真知子 1982「埋葬施設と頭位」『徳島県博物館紀要』第13集 徳島県博物館
春成秀爾 1982「縄文社会論」藤本強・加藤晋平・小林達夫編『縄文文化の研究』第8巻 社会・文化 雄山閣
小玉準 1983「検出された遺構、遺物の検討」『平鹿遺跡』秋田県文化財調査報告書 101
岩崎卓也 1983「古墳時代の信仰」『季刊考古学』第2号 雄山閣
菅原康夫 1983「頭位・埋葬法」『萩原墳墓群』
辻村純代 1983「東中国地方における箱式石棺の同棺複数埋葬」『季刊人類学』第14巻第2号 社会思想社
古谷毅 1984「南関東地方の甲冑出土古墳の性格」『史学研究集録』第9号 国学院大学日本史学専攻大学院会
天羽利夫・岡山真知子・宮本敬子・高橋正則 1984「長谷古墳調査報告」『徳島県博物館紀要』第15集 徳島県博物館
玉城一枝 1985「讃岐地方の前期古墳をめぐる二、三の問題」『末永先生米寿記念献呈論集』末永先生米寿記念会
三宅博士・広江耕史・赤沢秀則 1985「主体部の頭位」『奥才古墳群』

- 竹中信常 1985 「北枕考」『宗教研究』第 59 卷第 1 号 日本宗教学会
- 阿部恵・手塚均 1986 「埋葬人骨について」手塚均編『田柄貝塚 I』宮城県教育委員会
- 茂木雅博 1986 「箱式石棺考」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会
- 橋本博文 1986 「埋葬頭位」『古海原前古墳群発掘調査概報』群馬県大泉町教育委員会
- 都出比呂志 1986 『堅穴式石室の地域性の研究』大阪大学文学部国史研究室
- 三木文雄 1986 「前方後方墳について」『那須駒形大塚』吉川弘文館
- 天羽利夫 1986 「古墳にみる地域性」『図説発掘が語る日本史』5 中国・四国編 新人物往来社
- 都出比呂志 1986 「墳墓」『岩波講座日本考古学』4 集落と祭祀 岩波書店
- 北條芳隆 1987 「墳丘の形態と方位からみた弥生墳丘墓と前方後円墳」『日本考古学協会 1987 年度大会研究発表要旨』日本考古学協会
- 峰山巖 1987 「埋葬の頭位」『高砂貝塚 噴火湾沿岸貝塚遺跡調査報告 2 札幌医科大学解剖学第二講座』
- 都出比呂志 1987 「前方後円墳出現期の地域性」『埼玉考古』第 23 号 埼玉考古学会
- 斎藤忠 1987 『東アジア葬・墓制の研究』第一書房
- 北條芳隆 1987 「墳丘と方位からみた七つ塊 1 号墳の位置」近藤義郎・高井健司編『七つ塊古墳群』七つ塊古墳群発掘調査団
- 春日真実 1988 「主体部」秋山進午ほか編『谷内 16 号墳』富山大学人文学部考古学研究室
- 岸本直文 1988 「丁瓢塚古墳測量調査報告」『史林』第 71 卷第 6 号 史学研究会
- 菅沼圭介 1988 「弥生墓にみられる埋葬頭位方向」『史学』第 58 号 慶應義塾大学
- 佐々木長生 1988 「埋葬状態からみた靈魂観」『三貫地貝塚』福島県立博物館
- 森幸彦 1988 「人骨の埋葬状態について」『三貫地貝塚』福島県立博物館
- 小林達雄 1988 「二項対立の世界観」『縄文人の道具』古代史復元 3 講談社
- 古瀬清秀 1988 「香川の前古墳」『香川県史』第 1 卷 香川県
- 都出比呂志 1988 「前方後円墳起源論と秋月遺跡」『求真能道』巽三郎先生古稀記念論集 歴史堂書房
- 宇野隆夫 1988 「結語—前方後円墳はどのようにして出現したか—」秋山進午ほか編『谷内 16 号墳』富山大学人文学部考古学研究室
- 辻村純代 1988 「古墳時代の親族構造について」『考古学研究』第 35 卷第 1 号 考古学研究会
- 柳沢一男 1988 「福岡県の古墳時代」『福岡県地域史研究』8 福岡県
- 小林隆幸 1989 「前期古墳の埋葬頭位」『保内三王山古墳群』三条市教育委員会
- 都出比呂志 1989a 「古墳の誕生と終焉」『古墳時代の王と民衆』古代史復元 6 講談社
- 都出比呂志 1989b 「前方後円墳の誕生」白石太郎編『古代を考える 古墳』吉川弘文館
- 伊藤雅文 1989 「石川における前半期古墳小考」『北陸の考古学』II 石川考古学研究会
- 甘粕健 1989 「三王山古墳群の歴史的評価」『保内三王山古墳群』三条市教育委員会
- 1990 年代
- 北條芳隆 1990 「古墳成立期における地域間の相互作用」『考古学研究』第 37 卷第 2 号 考古学研究会
- 福永伸哉 1990 「主軸斜交主体部考」『鳥居前古墳—総括編—』大阪大学文学部考古学研究室
- 高橋龍三郎 1991 「縄文時代の葬制」山岸良二編『原始・古代日本の墓制』同成社
- 堀越正行 1991 「貝の花集落の埋葬」『史館』第 23 号 史館同人
- 武蔵美和 1991 「基底部構造から見た蓮華谷古墳群(II) 2 号墳の評価」『徳島県埋蔵文化財センター一年報』vol. 2 財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 吉水真彦 1991 「近江湖西地域南部における古式古墳の様相」『滋賀考古』第 6 号 滋賀考古学研究会
- 福永伸哉 1992 「近畿地方の小堅穴式石室」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学文学部考古学研究報告第 2 冊 大阪大学南原古墳調査団
- 北條芳隆 1992 「弥生終末期の墳丘墓と前方後円墳」『古備の考古学的研究』上 山陽新聞社
- 小林達雄 1993 「縄文集団における二者の対立と合一性」坪井清足さんの古希を祝う会編『論苑考古学』天山舎
- 平林彰 1993 「社会組織について」『明科町内：北村遺跡 11 本文編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 14

- 千葉豊 1993a 「配石墓小考(下)―辰野町樋口五反田遺跡の「配石址」を中心に」『伊那路』第37巻第12号 上伊那郷土研究会
- 千葉豊 1993b 「配石墓小考(上)―辰野町樋口五反田遺跡の「配石址」を中心に」『伊那路』第37巻第11号 上伊那郷土研究会
- 大野憲司 1994 「Ⅲ遺跡の埋葬区と墓群」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書17』秋田県文化財調査報告書242
- 大工原豊・林克彦 1994 「頭位方向」『中野谷地区遺跡群』安中市教育委員会
- 池淵俊一 1994 「島田黒谷Ⅱ遺跡 木棺墓の構造について」『明子谷遺跡・島田黒谷Ⅱ遺跡・島田黒谷Ⅲ遺跡・猫ノ谷遺跡』一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書6
- 柴田英樹 1994 「甬崎天神山遺跡 土壙墓の主軸方向と頭位について」『郷境墳墓群・前池内遺跡・後池内遺跡・黒住・雲山遺跡・甬崎天神山遺跡8』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89
- 山田康弘 1994 「縄文時代の経産婦の埋葬」『物質文化』第57号 物質文化研究会
- 亀山行雄 1994 「郷境墳墓群 埋葬施設について」『郷境墳墓群・前池内遺跡・後池内遺跡・黒住・雲山遺跡・甬崎天神山遺跡8』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89
- 西澤明 1994 「縄文時代中期・後期の墓址における区分原理」『東京考古』第12号 東京考古談話会
- 堀越正行 1994 「船橋市古作貝塚の埋葬」『史館』第25号 史館同人
- 大工原豊 1995 「群馬県天神原遺跡」『縄文時代における自然の社会化』季刊考古学別冊6 雄山閣
- 富樫泰時 1995 「秋田県大湯遺跡」『縄文時代における自然の社会化』季刊考古学別冊6 雄山閣
- 小林達雄 1995 「縄文時代の『自然の社会化』」『縄文時代における自然の社会化』季刊考古学別冊6 雄山閣
- 都出比呂志 1995 「祖霊祭式の政治性」『日本古代の葬制と社会関係の基礎的研究』平成6年度科学研究費補助金(一般A)研究成果報告書 大阪大学文学部
- 蔵本晋司 1995 「香川県高松市三谷五市舟古墳の再検討」『香川考古』第4号 香川考古刊行会
- 弘田和司 1996 「畑ノ平古墳群 古墳群の変遷と年代」『西大沢古墳群 畑ノ平古墳群 黒土中世墓 虫尾遺跡 茂平古墳 茂平城』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告111
- 財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター 1996 「大星山古墳群 石槨」『長野市内その5: 大星山古墳群・北平1号墳7』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書20
- 田中裕 1996 「前方後円墳の規格と地域社会」『考古学雑歩―西野元先生退官記念論文集』西野元先生退官記念会
- 宇垣匡雅 1997 「前期古墳における刀剣副葬の地域性」『考古学研究』第44巻第3号
- 山田康弘 1997 「縄文時代の子供の埋葬」『日本考古学』第4巻第4号 日本考古学協会
- 倉林真砂斗 1997 「竪穴式石槨の特色と問題点」『日上天王山古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集
- 林克彦・細野千穂子 1997 「墓制からみた地域性―縄文後晩期・関東地方西部の墓制の検討から―」『史友』第29号 青山学院大学史学会
- 池淵俊一 1998 「出雲における五反田1号墳の位置付けとその評価」『門生黒谷1遺跡 門生黒谷2遺跡 門生黒谷3遺跡 (門生山根1号窯・門生黒谷1号窯・五反田古墳群)』一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14
- 宇垣匡雅 1998 「檜原古墳群」『高下遺跡・浅川古墳群ほか・檜原古墳群・根岸古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告123
- 岸本一宏 1998 「竜山石製長持形石棺の特徴と埋葬方向」『網干善教先生古稀記念考古学論集』上巻 網干善教先生古稀記念会
- 林謙作 1998 「縄文社会は階層社会か」都出比呂志編『古代史の論点』第4巻 権力と国家と戦争 小学館
- 澤谷昌英・田中正治郎 1998 「円形周溝墓群」『長野市内その1: 篠ノ井遺跡群・石川条里遺跡・築地遺跡・於下遺跡・今里遺跡4』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書33
- 右島和夫 1998 「埋葬頭位から見た東国古墳の地域性」『考古学論集』上巻 網干善教先生古稀記念会
- 小林達雄 1999a 「太陽の通る道」『天文学がわかる』アエラムック52、朝日新聞社
- 小林達雄 1999b 「縄文ランドスケープ」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』14 秋田県埋蔵文化財センター
- 草原孝典 1999 「埋葬頭位からみた長坂古墳群」『長坂古墳群』岡山市教育委員会
- 乗岡実 1999 「箱式石槨」『宗形神社古墳』岡山市教育委員会
- 北條芳隆 1999 「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学友の会
- 宮澤公雄 1999 「甲斐の積石塚」『東国の積石塚古墳』山梨県考古学協会 1999年度研究集会 山梨県考古学協会

渡辺貞幸 1999 「堅穴式石室」『荒島古墳群発掘調査報告書』安来市埋蔵文化財調査報告書 27

丹羽佑一 1999 「縄文人の世界観（中期編）」『人類史研究』第 11 号 鹿児島大学

柳沢兌衛 1999 「大湯環状列石と二至二分の太陽」『東アジアの古代文化』第 99 号 大和書房

鈴木一有 1999 「五ヶ山 B2 号墳の被葬者像」『五ヶ山 B2 号墳』浅羽町教育委員会

●2000 年代

都出比呂志 2000 『王陵の考古学』 岩波書店

原田敏照・松山智弘 2000 「社日古墳群の位置づけとその評価」『社日古墳 12』一般国道 9 号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 12

北條芳隆 2000 「前方後円(方)墳誕生の経緯」『古墳時代像を見直す』青木書店

宇垣匡雅 2001 「吉備南部における古墳時代前半期小墳の埋葬頭位」『古代吉備』第 23 集 古代吉備研究会

大工原豊・関根真二 2001 「中野谷松原遺跡」安中市史編さん委員会編『安中市史』第 4 巻原始・古代中世資料編

大工原豊・林克彦 2001 「天神原遺跡(後・晩期)」安中市編さん委員会編『安中市史』第 4 巻原始・古代中世資料編

赤塚次郎 2001 「墳墓と槽形木棺墓について」『川原遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 91

片桐孝治 2002 「原間地区・樋端地区の中期古墳について」『原間遺跡Ⅱ』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 42

下江健太 2002 「米子平野における古墳時代前期の小古墳群の検討」『古市遺跡群 3』鳥取県教育文化財団調査報告書 78

児玉大成 2002 「小牧野遺跡」小林達雄編『縄文ランドスケープ』ジョーモネスクジャパン機構

佐野一絵 2002 「秋田県伊勢堂」小林達雄編『縄文ランドスケープ』ジョーモネスクジャパン機構

大工原豊 2002a 「群馬県中野谷松原遺跡」小林達雄編『縄文ランドスケープ』ジョーモネスクジャパン機構

大工原豊 2002b 「群馬県野村遺跡」小林達雄編『縄文ランドスケープ』ジョーモネスクジャパン機構

宮尾亨 2002 「環状列石の縄文ランドスケープ」小林達雄編『縄文ランドスケープ』ジョーモネスクジャパン機構

片桐孝浩 2002 「土壇墓・土器棺墓の主軸方位について」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 43 冊 樋端遺跡』香川県教育委員会

石部正志 2003 「前方後円墳の方位について」大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会『新世紀の考古学—大塚初重先生喜寿記念論文集』纂修堂

置田雅昭 2003 「奈良盆地島南部の古墳」『大和の古墳Ⅰ』近畿日本鉄道株式会社

杉井健 2003 「熊本地域における前期古墳の様相」『新宇土市史』通史編 第 1 巻自然・原始 宇土市史編纂委員会

小郷利幸 2003 「埋葬施設」『橋本塚古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告 73

西琢朗・百田博宜・藤森紀明・北條芳隆 2003 「関東地方の前方後円墳のデータベース化とその分析」『日本土木学会 2003 年度大会報告』日本土木学会

荻谷俊介 2003 「纏向遺跡の方格地割の可能性」『初期古墳と大和の考古学』学生社

赤塚次郎 2003 「猫島遺跡の墳墓と木棺墓」『猫島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 107

山田康弘 2003 「埋葬頭位は社会組織を表すのか—縄文時代の人骨出土例による再検討」立命館大学考古学論集刊行会編『立命館大学考古学論集Ⅲ』

内藤善史 2003 「土壇墓群における埋葬頭位について」『前内池遺跡・前内池古墳群・佐古遺跡 1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 174

北條芳隆 2003 『東四国地方における前方後円墳成立過程の解明』平成 12～14 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書

宇垣匡雅 2004 「吉備の首長墓系譜」『古墳時代の政治構造』青木書店

弘田和司 2004 「石室主軸・埋葬頭位」『久田原遺跡/久田原古墳群 2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 184

北條芳隆 2004 「前方後円墳の終焉にかんする予察」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』平成 13～15 年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書

北條芳隆 2004 「前方後円墳の築造と方位観念・社会的背景の復元にかんするデータベースの活用」『人文科学とデータベース』第 9 回公開シンポジウム資料

山田康弘 2004 「埋葬頭位と二至二分」『月刊考古学ジャーナル』NO. 513 ニューサイエンス社

福永伸哉 2004 「交易の発展と赤坂今井墳丘墓」『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告』峰山町教育委員会

- 遠藤正夫・児玉大成 2005 「青森県小牧野遺跡」小林達雄編『縄文ランドスケープ』有朋書院
- 財団法人徳島県埋蔵文化財センター2005「XVⅢ 西山谷古墳群」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 62
- 西澤明 2005 「墓制からみた縄文集団」明治大学文学部考古学研究室編『地域と文化の考古学』1 六一書房
- 廣瀬寛 2005 「壺形埴輪の大型化とその背景」『將軍山古墳群Ⅰ』新修茨木市史資料集 8
- 藤田等 2005 「総括」『古浦遺跡』古浦遺跡調査研究会・鹿島町教育委員会
- 栗林誠治 2005 「XVⅡ 東林院古墳群」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 62
- 小林達雄 2005 「縄文ランドスケープ 自然的秩序からの独立と縄文的世界の形成」小林達雄編『縄文ランドスケープ』有朋書院
- 都出比呂志 2005 『前方後円墳と社会』塙書房
- 川部浩司 2006 「横立山経塚古墳の再評価」『香川考古』第 10 号 香川考古刊行会
- 西田和浩 2006 「一国山 3・4・5 号墳について」『南坂 8 号墳・一国山城跡・一国山古墳群』
- 横田明日香 2006 「讃岐における舟形石棺の一樣相」『香川考古』第 10 号 香川考古刊行会
- 中嶋友文 2007 「朝日山(1) 遺跡の墓群と埋葬頭位」谷口康浩・小杉康・西田泰民編『死と弔い』縄文時代の考古学 9 同成社
- 山田康弘 2007 「縄文時代の葬制」谷口康浩・小杉康・西田泰民編『死と弔い』縄文時代の考古学 9 同成社
- 山田康弘 2008a 「骨と人骨」設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編『集落からよむ弥生社会』弥生時代の考古学 8 同成社
- 山田康弘 2008b 『人骨出土例にみる縄文の墓制と社会』同成社
- 北條芳隆 2009a 「第二の『大和』原風景」『日々の考古学』2 六一書房
- 北條芳隆 2009b 『大和』原風景の誕生『死の機能 前方後円墳とは何か』岩田書院
- 吉井理 2009 「関東地方における前方後円墳の墳丘方位について」『日々の考古学』東海大学考古学研究室編
- 2010 年代
- 山田康弘 2010 「古病理学的所見と縄文・弥生時代の埋葬属性との対応関係」『月刊考古学ジャーナル』NO. 606 ニューサイエンス社
- 菅原康夫 2010 「萩原 1 号墓・2 号墓の主体部構造と諸問題」『萩原 2 号墓発掘調査報告書—指定史跡等保存活用事業埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—』徳島県教育委員会
- 福永伸哉 2011 「埋葬姿勢と埋葬配置」『墳墓構造と葬送祭祀』古墳時代の考古学 3 同成社
- 稲木章宏 2012 「房総半島西岸～上総を中心に」『東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク』第 17 回東北・関東前方後円墳研究大会発表要旨資料
- 滝沢誠 2012 「東日本における古墳時代の斜交埋葬施設」『先史学・考古学研究』第 23 号
- 北條芳隆 2012 「景観史における前方後円墳の時代」『東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク』第 17 回東北・関東前方後円墳研究大会発表要旨資料
- 小林圭一 2013 「西海淵遺跡と西田遺跡の墓群について」『年報 平成 24 年度』公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 北條芳隆 2013 「東の山と西の古墳」『考古学研究』第 59 巻第 4 号 考古学研究会
- 赤塚次郎 2014 「瀨波の東之宮古墳」『史跡東之宮古墳』犬山市埋蔵文化財調査報告書 12
- 山田康弘 2014 「山陰地方における弥生時代前期の墓地構造」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 185 集 国立歴史民俗博物館
- 小原貴樹 2015 「境矢石遺跡の弥生時代墳墓について」『境矢石遺跡 5』一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書 6
- 北條芳隆 2017 「関東地方への前方後円(方)墳の波及を考える」東松山市教育委員会編『市制施行 60 周年記念事業シンポジウム 三角縁神獣鏡と 3～4 世紀の東松山』考古学リーダー 26 六一書房
- 北條芳隆 2017a 「古墳・火山・太陽」『第四紀研究』第 56 巻第 3 号 日本第四紀研究会
- 北條芳隆 2017b 『古墳の方位と太陽』同成社
- 北條芳隆 2018 「野本將軍塚古墳の立地と方位」『早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所 研究論集第 1 冊：野本將軍塚古墳と東国の前期古墳』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所
- 赤塚次郎 2018 『邪馬台国時代の東海の王 東之宮古墳』新泉社
- 北條芳隆 2019a 「古事記と景観・天文考古学」『古事記年報』第 61 号 古事記学会

北條芳隆 2019b 「藤本英夫氏の業績とその再検討」『天文学との連携にもとづく考古学・古代史学研究法の構築』科学研究費補助金・基盤研究(A) 科研費申請ニュースレターNO.1

北條芳隆 2019c 『駿河の古墳と火山信仰』現地解説用ブックレット 東海大学生涯学習講座

●2020年代

赤塚次郎 2020 「東之宮古墳に観る二集団と東海六部族」『研究紀要』7 特定非営利活動法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク

北條芳隆 2020 「先史社会と冬至の祭り」『遺跡学研究の地平』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会

滝沢誠 2020 「古墳の立地と視認性」常木晃先生退職記念論文集演習委員会編『世界と日本の考古学—オリーブの林と赤い大地—』六一書房

蔵本晋司 2021 「埋葬頭位」『湊山下古墳7』香川県教育委員会ほか

Norma Camilla Baratta, Giulio Magli, and Arianna Picotti 2022 "The Orientation of the kofun Tombs" 『remote sensing』 Remote Sens

北條芳隆 2022 「高千穂の峰と前方後円墳の祭り」『神話の源流をたどる』

Hojo Yoshitaka 2022 "A Primitive Calendar Used by Prehistoric Farmers in Japan" Research Papers of the Anthropological Institute Vol.11 Anthropological institute, Nanzan University

白川美冬 2022 「景観史的観点からみた前方後方墳」『東海史学』第56号 東海大学史学会

北條芳隆 2022 「纏向古墳群と周辺景観」『纏向学の最前線』桜井市纏向学研究センター設立10周年記念論集 桜井市纏向学研究センター

河野一隆 2022 「九州から見た東日本の装飾古墳」『東日本の古墳壁画を考える 発表要旨』考古学研究会第57回東京例会 考古学研究会

白川美冬 2022 「埋葬施設と太陽一朝日遺跡を中心に—」『考古天文学と奈良の景観』考古天文学関連シンポジウム配布資料

【その他 参考文献】

近藤義郎 1985 『前方後円墳の時代』 岩波書店

高倉洋彰 1980 「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」『考古学研究』第20巻第2号 考古学研究会

溝口考司 1995 「福岡県甘木市栗山遺跡C群墓域の研究」『日本考古学』第2号 日本考古学協会

溝口考司 2014 「世界が変わるとき」『考古学研究』第61巻第2号 考古学研究会